令和６年度中学校武道授業（相撲）指導法研究事業

令和６年度中学校武道授業（相撲）指導法研究事業〔主催=日本武道館、日本相撲連盟、日本武道協議会、後援＝スポーツ庁、協力＝宮代町立須賀中学校、宮代町教育委員会〕が、令和７年１月９日、南埼玉郡宮代町立須賀中学校において、研究者５名、連盟事務局１名の計６名が出席して実施された。

開講式では、安井和男公益財団法人日本相撲連盟副会長と沢登英徳公益財団法人日本武道館振興課主事兼課長補佐が、それぞれ主催者挨拶を述べた。

開講式後、校庭に移動し、荻根澤卓郎教員の指揮のもと、中学３年生男子生徒 22 名（2 クラス）を対象に、6 時間中 1 時間目の授業が行われた。本時は、「昨年学んだ知識を整理するとともに、自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて取り組み方を工夫する」をテーマに、相撲につながる体力つくり運動や、基本動作を身につける運動、押し・受けの練習などを中心に進められた。

同校は、毎日新聞社が主催する毎日カップ「中学校体力つくりコンテスト」において、2023 年に第一学習社賞に入賞するなど、8 年連続体力優良校として、すべての体育授業において運動量の多さが特色であり、授業冒頭に行った柔道の帯を腰につけ、制限時間内で取り合う「しっぽとり」では、生徒たちが縦横無尽に校庭を素足で走り回る姿から、その理由を伺い知ることができた。

また、柔道の帯を代用してまわしをつける際、上手くつけることができない生徒に対して、他の生徒が自発的に手伝うなど、常に全員で声かけをしながら活気ある授業が展開された。

蹲踞をしながら 2 人 1 組で押し合う受身の練習では、頭を打たないように注意するとともに、体格差があっても怪我をしない工夫を考えながら取り組むようにアドバイスがあった。また、相撲特有のかばい手を練習した。

その後、校庭に設置された土俵に移動し、攻め手と受け手に分かれ、3～5 秒程度で押しの練習と受けの練習を行った。生徒同士、ローテーションをしながら、体格差のある生徒と立ち会いを繰り返し行った後、体重の軽い者が重い者に勝つにはどのようにしたら良いか、グループで話し合いを行ったところ、生徒の一人から「組んだ時に引くと、相手の重心が不安定になるので、押すことができる」と発表があった。

授業後、荻根澤教員も加わり、研究協議を行った。桑森真介研究者から「生徒たちの元気の良さに驚いた。かばい手に関して、競技者は自然と身につくものだが、初心者にそれを求めるのは無理なことなので、本日の取り組みは大変有効であり、指導法として、ぜひ取り入れていきたい」と発言があった。また、安藤均研究者から「かばい手の意義も教えてあげるとさらに良いのではないか」など、かばい手の取り組みについて、研究者一同、参考になった旨の感想が寄せられた。

滿留久摩研究者からは、「今後の授業展開として、試合も行うのか」という質問があり、荻根澤教員から「生徒は、相撲特有の相手と触れ合うことに一番の喜びを感じているようなので、試合がすべてではないが、2 つ土俵があるので、重量級と軽量級で分けて 10 秒程度の試合を行うことは想定している」と発言があった。最後に桑森研究者が「指導書はあくまでも案なので、各学校の方針や実態に応じてアレンジしていただいて大いに結構である」と締めた。

閉講式では、研究者を代表して桑森研究者が講評を、学校代表として谷義明校長、主催者として安井副会長がそれぞれ挨拶を述べ、閉会した。